

<今回>227回目 2018年1月29(月)15時~18時 601号室
読書は9冊目「邪馬壹国の証明」 p61村岡史学への傾倒 より

<前回>226回目(18-1-8) 出席者10名

資料(18-01-08-1)前回のまとめ(清水)

-2)法隆寺論争の家永三郎氏の最後の書簡(富川)

-3)埼玉古墳群資料(榛葉)

A 報告

新年になって、雨の中、寒い中ありがとうございます。今年もよろしくお願ひします。

懇親会7名 津多屋14759円(7・2000) -759円

B 資料 -1)前回のまとめ、鞞の文字に訂正。また南朝の天子の石馬は「獅子の石獸」、に訂正。

-2)家永三郎氏との法隆寺論争の出版承諾の最後の書簡に古田氏の精緻な論証を評価すると同時に古田説に対する感想が富川さんから紹介された。当時の最も進歩的な文化人であり、古代史研究者でもあった学者の古田説と古田氏に対する感想が示されていた。古田氏の精緻な論証には感心しつつも、批判に同調できない学者たちのいらだちめいた文が示されている。ご自身の研究対象である3点に対して少なくとも論旨に飛躍があると指摘、ともすると論争が感情的、非生産的になると指摘されていた。出版を承諾したのは論争に生産性を認めたからという。①一屋無余の解釈。建物は焼けたが本尊には触れていないという説。②法隆寺金堂の本尊が九州の寺からの搬入した説には飛躍があるという、③天寿国繡帳の聖徳太子の忌日の後世改竄説は承諾しがたい。

-3)榛葉氏より提供された「さきたま古墳群」の資料、古田氏の鉄剣銘の解説とその古墳群がよくまとめられていた。

C 読書 「邪馬壹国の証明」のp54 わたしの学問の方法 から。

1)学問の個々の結論ではなく、学問の方法に注目したらよいと指摘。季刊「邪馬台国」の発刊当初は「いかなる異論も辞せず歓迎する」との編集方針が示されていた。だから「歴史を研究する人のために」よいと期待した。(やがて安本美典に編集長が変わった)

2)「母の国」親鸞研究 当時神戸の森学園などの高校教師をしていた時代。敗戦(18歳)の衝撃は単に負けたというより、人心の移りようが衝撃だった。軍国政治の一端にあった世人が民主主義を説き始める。大小様々な変節漢が日本列島に満ち溢れていた。戦時中は共産主義者だけでなく、大本教、創価学会も弾圧の中にいた。

3)親鸞は歎異抄の中で、親鸞は「弟子の一人も持たずそうろう、たとひ法然上人にすかさしまひらせて地獄に落ちたりともさらに後悔すべからずそうろう。」こんな言葉を吐く親鸞とはどういう人間だったのか研究したいが出発点。

4)戦時中の護国思想の権化たる親鸞聖人が民主主義の先達たる親鸞聖人と同じ教団の同じ著作者名ででていた。親鸞の書簡中に「朝家の御ため、国民のために念仏をもふしあわせたいさふらふはばめでとうさふろうべし」(御消息集二) 親鸞の「護国思想」論争に対して、この類例を全著作に求めた結果”念仏弾圧に狂奔する末法の朝家・国民に「非妥協的批判」を加えその上にたって「ひかふたる世の人々をいのる」念仏をなし、彼らを「不便」に思う「憐れみ」の念仏をすすめたもの”という理解を得た。

5)私は親鸞の全用例を調べたという自信に立って応答した。この悉皆調査の学問の方法に自信を得て「原始専修念仏運動における親鸞集団の課題「序説」 流罪目安の信憑性についての成果」(史学雑誌昭和40年8月号)を物した。

次回日程 18-2-2(金) 16時から18時 601会議室

-2-26(月) 15時から18時 601会議室

－3－9(金) 16時から18時 601会議室